

インタビュー

人生いつだって これから

99歳の現役詩人がつづる言葉

詩人

柴田トヨ

詩人

柴田健一

柴田トヨさんは1911年、栃木市生まれ。裕福な米穀商の一人娘だったが、10代の頃に家業が傾き、料理屋などへ奉公に出る。33歳で調理師の柴田良吉さんと結婚。翌年、健一さんを授かる。良吉さんとは1992年に死別。以来、宇都宮市内で1人暮らし。詩作は、一人息子の健一さんのすすめで90歳を過ぎてから始める。産経新聞の「朝の詩」に詩を投稿、入選する。2009年、書きためた詩を自費出版。10年、飛鳥新社から内容を追加、装丁を変更して詩集「くじけないで」として再出版。100万部を超えるベストセラーに。



90歳を過ぎてから 詩を投稿

武井 2010年3月の発売以来、100万部を超えるベストセラーとなっている柴田トヨさんの詩集「くじけないで」。トヨさんは99歳、栃木保健医療生協の組合員であり、宇都宮協立診療所の往診患者さんです。昨年5月から僕はトヨさんの主治医になり、月2回、ご自宅へ往診におじゃましています。今日は、息子さんの柴田健一さんにも加わっていただき、いつもの往診とは違って、詩についていろいろお話をうかがいたいと思います。よろしくお願ひします。

トヨさんが詩を書き始めたのは90歳を過ぎてからということですが、詩を書くようになったきっかけは何だったのですか。

トヨ 私が詩を書くきっかけは、息子の健一のすすめでし

た。腰を痛め、趣味の日本舞踊が踊れなくなり、気落ちしていた私を健一がなぐさめてくれたんです。健一は高校時代から短歌が好きで、同人誌を出したり、月に1回は仲間を50人くらい集めて詩の会をやっていたんです。そういうのを見て、私も年をとって何もできなくなったら、詩をやりうと心に決めていました。

健一 母に詩作をすすめた私が、そもそも詩を書くようになったのは母の影響なんです。

トヨ 小学生の時、健一は母親っ子で、学校へ行きながらなかつたんです。1年間ほど毎日私が学校へ送り届けて、給食の世話までして帰っていました。

健一 小学校4年生の時に、詩の宿題が出たんです。私は母に「詩は、どんなふうに書けばいいのかな？」と聞きま

した。すると、「ありのままを素直に書けばいいんじゃない」と教えてくれたんです。母にいわれたように書いた詩が、たまたま全国の詩のコンクールで入賞。「自分でも詩が書けるんだ」と自信がもて、詩を書く楽しさを知りました。それから映画や読書が好きだった母の影響もあって文学に興味を持ち、中学・高校と詩を書き続けました。文芸雑誌などにも投稿をして、よく入賞していました。

武井 トヨさんの影響で健一さんが詩に出会い、その健一さんのすすめでトヨさんも詩を書くようになったのですね。

健一 私が母に詩を書いてみたらとすすめた時、「こういう詩を書いてみたの」と引き出しから出してきたのが『目を閉じて』という詩でした。あまりに良い詩だったので、てっきり何かを写したも

のかと思つたのですが、そうではありませんでした。

トヨ この詩を、詩人の新川和江さんが選者をしている産経新聞『朝の詩』に投稿したら、入選したんです。その時の喜びが忘れられなくて、私は詩を書くようになり、今では詩作が生きがいになっています。

葬儀代で詩集を 自費出版

武井 トヨさんの詩は、産経新聞『朝の詩』に度々入選されて、読者にも人気があったようです。ところで、どのような経緯で詩集を出すことになったのですか？



インタビュー
武井 大

栃木保健医療生協
宇都宮協立診療所 医師



トヨ 私が詩を書き始めて8年ほどして、新聞社の人から、読者の人気があるので詩集を出すようにすすめられました。でも、詩集を出すにはお金もかかるし、出したってそうそう売れないでしょ。躊躇してしまいましたら、さらに新聞社の人から、「ぜひ出版したいので、スポンサーを探してきます」と。でも結局、1年待ってもスポンサーは付かなかった…。

ある日、健一と話している時に葬式の話になったんです。健一は、葬儀代は親不孝をしてきた自分が出すというの。だけど私は、「葬儀代くらいは用意しているからいい」と答えると、「それなら葬儀代を出す代わりに、詩集を記念に作ろう」といい出したんです。

健一 親しい人たちに記念として贈ろうと、自費出版で詩集を出したんです。すると、出版社に問い合わせの電話がひっきりなしにかかってきて増刷ということに…。

トヨ 詩集が好評だといわれても、きつと出版社の人が私を励ますつもりでいってくれているんだらうと思っていました。

健一 それから1年ほどして、飛鳥新社の方に声をかけていただ

き、詩集を再出版することになりました。自費出版で出した時は、『朝の詩』の読者に支えられて売れたのだらうし、今度は値段も高いからそう簡単には売れない。私の伝^{ついで}で売って歩かなければいけないかなと思っていました。でも、1週間のうちに1万冊増刷になって、その後も3万、5万と増刷が決まって…。記念に作ったものだから、売れなくてもかまわないし、有名にならなかったわけではないのに、こうやって脚光を浴びるといのは面白いものですね。私のように10代の頃から詩を書き続け、啄木のように有名になりたいと思っていた者は、結局日の目を見ないで…。(笑)。母は、この8年間で簡単に私を抜いちやうんですから。

トヨ だけど、あなたの親だからうれしいでしょ。

健一 もちろん、うれしいよ。でも詩人としてはライブ

ルというか、複雑な部分もあるんだよ。だって、私の詩の方が上手いと思っているもの(笑)。

トヨ ああ、そうだったね(笑)。

健一 ただ、私が一番うれしいのは、石川啄木の歌や相田みつをの詩を読んで今も私が涙を流すように、母の詩も多くの読者に勇気と感動を与えていて、それが後世に残るかもしれないということ。詩集が図書館に置いてあって、将来も誰かが母の詩を読み継いでくれるかもしれない。私はそれがうれしいんです。

親子2人3脚の詩づくり

武井 トヨさんの詩は、飾らない言葉で書かれていて、素直に心に入ってきます。身近な家族の大切さ、日々の生活のいとおしさといったものをハッと気づかされ、勇気づ

けられる。そして、それぞ
れの人生に重ね合わせて、
共感できる部分があるんで
す。そんなトヨさんの詩は、
いつ、どんな時に生まれる
のでしょうか？

トヨ 夜眠れない時など、寝
床にノートを持っていくんで
す。そして、いい言葉があれ
ば、それを書き留めておきま
す。毎週土曜日に、一人暮ら
しをしている私の様子を見に
来る健一に書いたものを見せ
るんです。すると、「母ちゃ
ん、いい詩ができたな」とい
う時もあれば、「こんなのダ
メだ！」といわれることも
あって、朗読しながら何度も
書き直します。あそこが悪い
な、ここが悪いな…といっ
た具合にね。

健一 必ず言葉に出して読
むということが大切なんで
す。母が紡いだ言葉を、私
が朗読する。何度も何度も
読んで、その言葉が生きて
いるかどうかを確かめなが

ら、心に響く言葉を切り取っ
ていきます。

トヨ だから、ひとつの詩を
作るのに10日くらいかかりま
す。

武井 母と息子の共同作業、
まさに2人3脚ですね。

健一 99歳の母と65歳の息
子で、詩について真剣に話し
合っています。詩作が親子の
大切なコミュニケーションに
なっています。高齢になって
も親子で楽しく、共同して何
かにとりくむ。詩作でなくて
も、みなさんも何かできると
思うんです。第二、第三の柴
田トヨが、もつといっぱい出
てきてほしいなと思います。

詩が親子関係を 深め、生きる力に

武井 健一さんから見て、ト
ヨさんが詩を書き始めてから
何か変わったところがありま
すか。

健一 いきいきしてきまし
たね。それまでは、「早く死
にたい」とか、心細いことを
いつていたんです。やはり自
分の好きなことを見つけるの
が大事ですね。好きな趣味で
も、好きな人でも、何か見つ
かれば、きつと生きる力が湧
いてくると思います。

トヨ 好きなことだったら
努力できるんです。好きな人
のためなら、こうしてあげよ
う、ああしてあげよう、こう
いう言葉をかけてあげよう、
そういう心の波動が生まれる
でしょ。それで人は幸せにな
れるんです。詩は、人の心に
寄り添う言葉だから伝わるの
だと思っています。

武井 息子さんと詩づくり
をされていて、うれしいな、
楽しいなと思うのはどうい
う時ですか。

トヨ 私はもう年ですから、
健一に「母ちゃん、しっかり
してくれ」とよくいわれます。

でも、これ以上はしっかりで
きないんですよ（笑）。ただ、
私が考えた言葉を、健一が朗
読して、2人でいっしょに詩
についていろいろ話し合っ
ていると元気をもらえるの。人
生はつらくて悲しいことば
かりではないと感じられる
んです。

武井 詩作を通じて親子の
関係を深めている時間が、ト
ヨさんの喜びであり、生きる
力になっているんですね。

トヨ 日々の一人暮らしの
中で、感じたことや思ったこ
とを詩にする。それが生きが
いなんです。

健一 心をありのままに言
葉にしているから、多くの人
の胸を打つのでしょうね。

武井 トヨさんの言葉は、99
年生きてきた重みが滲み出
ているように思います。人は誰
も、生きていく中でつらいこ
と、悲しいこと、いろんなこ



とがあるから、幸せを実感できるものなんです。

夜もあります。が、がんばって、しっかりと生きています。

しっかりと生きる！ 一人暮らし20年

武井 ご主人が亡くなられてから20年近く、トヨさんは一人暮らしをされていますね。

武井 宇都宮協立診療所とトヨさんのかかわりは、もう13年くらいになりますかね。

健一 現在母が住んでいるこの家は、父が買った家です。私が結婚した1970年頃には、ここで2世帯の親子4人でくらしていました。2年ほどして私が転勤になり、ここを離れなくてはならなくなりました。今は、車で1時間ほど離れたところに住んでいます。数年前に自分の家を建てた際も、母といっしょにくらせるように部屋をつくったのですが、母は思い出がいっぱい詰まったこの家を離れたくない。そういう母の気持ちもよく分かるんです。

トヨ そうですね。これまで診てくださった先生も、みんないい先生だった。武井先生もやさしくて、お世辞じゃなく本当にいい先生で、私、大好きなのよ(笑)。

トヨ 一人ぼっちで淋しい

では最後に、トヨさん、私たちの医療福祉生協についてひと言…。



トヨ 昨年末、体調を崩して診療所に入院しました。診療所では、いろんな先生が私のところへ来て「こんにちは」とか「体調はどうですか」とか、気さくに声をかけていた

てもらい、自分を気にかけてくれていることが伝わると、うれしいものなんです。

だいて、すごくうれしかった。自分が担当でない患者さんにも、ひと言を忘れない。軽部先生という若い先生は、私に毎日のように「トヨさん、詩はどうですか。いいのができましたか」と声をかけてくれたの。大好きだな、軽部先生。年寄りというのは、声をかけられるとすごくうれいんです。ちょっとしたひと言でいいんです。声をかけ

武井 日頃の声かけから、患者さんとのコミュニケーション、地域とのコミュニケーションは始まりますからね。人と人のつながりを大切に、患者さんしっかりと向き合って、寄り添って、質の高い医療をすすめていきたいです。トヨさんも、今年は100歳になりますね。ますますお元気で、これからも素敵な詩を書いてください。楽しみにしています。今日は、ありがとうございました。

柴田トヨさんの サイン入り詩集& 朗読DVDセットを プレゼント!

『くじけないで
詩集&朗読 DVDセット』
(朗読/柴田トヨ)

飛鳥新社

3名様



本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。

インタビュー
柴田トヨ、健一